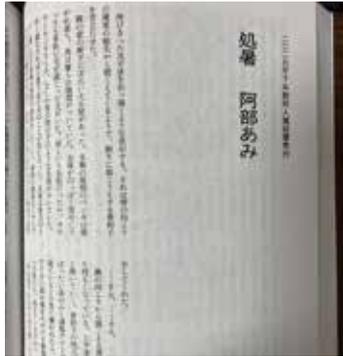


阿部あみさん 小説「処暑」 2025年下半年期同人雑誌優秀作



文学界 2025年12月号



徳島文学第八号に掲載された阿部あみさんの小説「処暑」が、二〇二五年下半年期同人雑誌優秀作として、文学界二〇二五年十二月号に転載された。

三田文学の「新同人雑誌評」で選ばれた最優秀作が、半期ごとに文学界に掲載される。阿部さんの作品は三田文学二〇二五年・秋合併号で取り上げられた。評者の加藤有佳織氏より「独特の閉塞感がある怪作、快作」と評価された。

<https://amzn.asia/d/94k6eXP>



ひとつだけ言えること

阿部あみ

『徳島文学八号』に掲載した「処暑」という小説が、幸運にも同人雑誌優秀作に選ばれた。小説を書き始めて十五年程になるけれど、いまだに小説の書き方における「正解」はわからない。人間の脳は楽をしようしようとするので、油断するとあらずじ的な文章を書いて小説が書けたなどと思ってしまう。客観的に書くことは重要だが、説明的に書くことはまったく違う。頭の中では分かっているけれど、時間経過や登場人物との関係性や過去の回想などを都合よく説明し、つまらない小説にしてしまう。とりあえず最後まで書き上げて、第三者の意見を聞いてみる。「書き上げる」ということは結構むずかしく、私のパソコンの中には日の目を見ない小説の断片がたくさん転がっている。

「処暑」を書き上げたのは二年ほど前で、初稿を当協会が開催する「短編小説講座」に出した。意見は様々だが、批判された部分についてはできるだけ心に留めておく。それを踏まえて推敲しながら、納得がいくまで書き直してみる。「正解」がわからない以上、いろんなパターンを書くしかない。要ることも要らないことも書き足して長くなった作品を、今度は「小説エキスパート講座」の合評に出してみる。当然、前回より厳しい意見が目立つ。「指摘されたからおっしゃるように書き直しました」は通用しない。根本的な部分から批判されると心

が折れてしまいそうになる。ま、そんなことで書くことをやめてしまえるなら、「小説沼」にはまることはなかっただろう。

小説を書くというのは、スピリチュアルな行為だと私は思っている。作者の中に、その小説において、その部分が、その文章が、必然であるという「直感」を享受することがある。その「直感」を得るためには、付け足したり削除したり言い換えたり、不毛とも思えるような推敲作業を繰り返すしか術がない。ひとつだけ言えることがあるとしたら、合評会で第三者の意見に耳を傾け、それを推敲の手がかりにすることは、案外、不毛な繰り返しから抜け出す近道なのかもしれない。

宮月中さん小説「すこやかなる」

『季刊文科』に転載

谷村順一氏による「同人雑誌季評」で会員の宮月中さんの小説「すこやかなる」(徳島文学八号掲載)が選ばれ、作品が季刊文科一〇一秋季号に転載された。



季刊文科
101 秋季号

うっかりさん俳句

第四回鈴木六林男賞 大賞受賞

徳島文学協会会員のうっかりさんが、俳句の第四回鈴木六林男賞の大賞を受賞した。猫の死を悲しみながら過ごした日々を題材に詠んだ二十句の連作俳句が評価された。

二〇二五年十二月四日の徳島新聞朝刊には、うっかりさんのコメントとともに詳細が掲載された。

違和感を育てる

うっかり

推敲中の三つの俳句連作を、珈琲とともにもう一度読み上げてみる。昨日から手を加えていないため昨日と同じなのだが、これを毎日やると小さな違和感が大きな違和感へと育っていく。一つ推敲するたびに、全体を通して読むことを繰り返す。小さいうちは気づかず放置してしまうことがあるが、大きくなつては無視もできなくなる。その違和感を摘み取るべく推敲するのだが、応募する賞や雑誌で求められているのは連作であるため、その流れに沿った句に推敲していかねければならない。独立した一句としては問題がなくても、流れに合わない句は推敲では対応できず、句を入れ替えることも換

討する。自分で良いと思つて詠んだ句だからこそ、自分で補正をかけて目を曇らせてしまい、詠むことよりもこの作業の方が難しく感じさせる。

珈琲を飲みながら、時間をかけて違和感を育てていくことが大事だと、焦らないように自分に言い聞かせる。今までの受賞作は数日でまとめたものばかりで、それが準賞や佳作止まりだった原因だと思つている。気づいてはいたが推敲がどれほど大事か、受賞したことで思い知った。最後まで書いたら完成というわけではなく、むしろ最後まで書くことは助走のようなものなのかもしれない。

推敲に時間をかけられたのは実家猫のランが死んでしまったことをテーマにしていたからだ。安易に死という言葉を使うなど、悲しさが前面に出てしまつて生臭い俳句しか詠めず、そ



徳島新聞朝刊 2025年12月4日

れらの句と向き合う過程で推敲ができ、ランの死とも向き合うことができた。結果として受賞した俳句連作にランは登場しない。猫の気配すらない。死に向き合った悲しみの深度にある日常を詠んだだけだ。感情を直接書くことが深く書く事には繋がらないと改めて推敲が教えてくれた。それでよかつたと思つている。

珈琲も飲み干してしまった。美味しいのは自分で淹れたからだろうか。とはいえ喫茶店で飲む方が美味しいことは知つているが、頻繁に行くほど裕福でもない。珈琲に対しては意図的に自分補正をかけているかもしれない。

高田友季子さん小説集 『ゼリーのようなくらげ』

トークイベント開催

美馬市の書店まるとしかくにて、八月三十日、小説集『ゼリーのようなくらげ』発刊記念イベントが開催され、著者の高田友季子さん、徳島文学協会の佐々木義登会長、版元のサウダージ・ブックス編集人アサノタカオさんの三人で文学トークを展開されました。

高田さんが佐々木会長と試行錯誤して表題作を完成させるまでの様子や、作品の読みどころなどが語られました。



イベントの様子

文学賞等に受賞された方はお知らせください
会員の皆様のご活躍を、「とと」や徳島文学協会のホームページでご紹介します。
小説、俳句、短歌などの文学賞を受賞された方は、事務局までメールでご連絡ください。賞の目安は授賞式に出席する程度です。
ホームページには小説のみ、「とと」には全てのジャンルの受賞実績を掲載予定です。
(紙面の都合上、全てを掲載できない可能性があるのでご了承ください)

岡崎ゆかさん 小説「こんにく芋スイッチ」

第十八回銀華文学賞佳作受賞

徳島文学協会会員の岡崎ゆかさんが、小説「こんにく芋スイッチ」で第十八回銀華文学賞佳作を受賞した。審査結果は文芸思潮第九十八号で発表された。

自転車を手に入れる

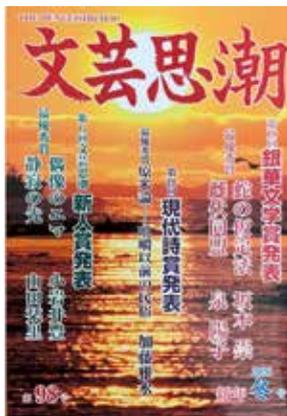
岡崎ゆか

二〇二四年に、ある同人誌に誘っていただき、迷いましたが思い切っ
て参加しました。八千字弱の小説を
どうにか書いて、本になったものを
手にしたときは信じられない気持ち
でした。その後、同人誌というもの
はまったくといっていいほど人の手
に渡らないという事実直面して、
これはこれで信じられない気持ちで
した。「せっかく書いたのに！」と
いう感情がどうしてもわきました。
数少ない感想をいただく中で、書き
きれてないところがわかり、そこを
書き足してみたら一万四千字ほどに
なりました。これなら公募に出せる
のではないかと探していたとき見つ
けたのが銀華文学賞でした。三次通

過の封書をもたらったときは、大げさ
でなく今までで一番幸せだと思いま
した。佳作までいただいていたいへん
光栄です。その喜びを胸に小説の執
筆に励んでいるかという何事も書い
ていません。

先日、金原ひとみさんの
『YABUNONAKA』を読んでいたら
このようなことが書かれていまし
た。「たいいていの人間が自分の一世
一代の実体験をいかして小説を書け
ばそれなりにおもしろいものができ
あがるものだ(中略)しかし書き続
けられるかどうかは己を生涯小説へ
と駆り立て続けるテーマがその人自
身にあるかどうかで決まるのだ」
大いに納得。とても冷静になれまし
た。金原ひとみさんありがとう。

いまは三日に一度くらいの割合で
自分に問いかけています。「なにか
書きたいことある?」返事は「え
えと、ないね」です。うん、知ってる。



文芸思潮 第98号

この八五〇字のコメントを二週間
の納期でという指示をもらい、その
日眠ると悪夢を見ました。トライア
スロンをしている人の自転車を借り
て目的地へ着かなければいけないの
ですが、だれも貸してはくれず途方
にくれました。「自転車」「粘り強
さ」「目的地」「作品」と考えると
示唆に富んだ夢ではありません。八
五〇字のノルマで悪夢を見ないくら
い書くのに慣れる、私はまずそこか
らです。

徳島文学協会の講座を受けて、小
説を書く方々のお話を聞くと、私
にとって推し活をしているようで
す。これからもどうぞよろしくお願
いいたします。

忘年会を開催しました

十一月二十九日に、徳島文学協会の忘年
会を「たきち」にて開催しました。ご参加
いただいた会員の皆様、ありがとうございました。

遠方からご参加いただいた方もおられ、
初めて対面される方もいらつしやいました。
それぞれ自己紹介をしながら、楽しいひと
時を過ごすことができました。

また、会では会員の阿部あみさん(同人
雑誌優秀作選出)、高田友季子さん(小説集
『ゼリーのようなくらげ』発刊)、うっかり
さん(第四回鈴木六林男賞大賞受賞)のご
活躍に祝意をこめて、花束の贈呈も行われ
ました。

今後とも会員の皆様同士で交流を持って
いただけるような機会を設ける予定ですの
で、ぜひお気軽にご参加ください。



「とこ」…古代エジプト文明の知恵の神「トート」
に由来する。

【詩】
L I F E

片桐 一彦

あるがまま
ただあるがまま
よせては返す波の如く
波にゆれる白い貝殻の如く
ただそのままに
新緑をゆらす風の如く
眠りを誘う雨だれの如く
ただそのままに
ただそのままに
さらりと生きる
きみは素敵だ

【短歌】

ミスミアヤカ

ミルクィはほんとは誰の味だっけ熱さま
まシートのにおいも遠い
マイメロのラジオネームを考えてあげ
る意さが目覚める朝に
婦人服売り場で笑うミッキィに眠れぬ
夜があるかと問う子

【エッセイ】
Adieu

福島 健太郎

この夏（二〇二五年）、神保町にある老舗の古本屋で『ランボー全集』（青土社）を買った。随分と長くランボーから遠ざかっていたのだが、懐かしい思いがして迷わず奮発した。だが、彼の全集を求めたのは、昔のように愛読するためではなかった。『地獄の季節』と訣別するためであった。

かつては、ぼくの記憶がたしかなら、冒頭を読んで眩暈がした。昔のうら寂しい記憶が頭を擡げる。不吉な「言葉の錬金術」が、私の心に毒を注ぐ。

また見つかった！
なにが？ 永遠。
太陽と溶け合う海。

彼の詩が暑さを煽る。渴きを煽る。「見者」は一体なにを見たか？

ぼくが毎日食べるのは、空気と、
岩と、石炭と、鉄。

ランボーを熟読していた頃、私は彼に同感していたのか。だが、地獄の業火に焼かれた彼の苦しみと、私の些細な苦しみとは同日の談ではないはずだ。

「悲惨の港」「火と泥の染みついた空の巨大な都市」。もはや彼に付いて行く気概はなかった。呪われた詩魂を追ってみても追いつけるものではない。堪えられるものではないのである。私は感慨を込めて『地獄の季節』を閉じ、彼に Adieu を告げた。

【エッセイ】
推しのいる時

有雅 瞳

「ミーハーおばさん」——三十年ほど前、ドラマの感想をテレビ局へ送る葉書に書いていた私のペンネームだ。当時トレンドイ俳優と言われていたKさんに私はすっかり嵌っていた。彼の視線や台詞の言い回し、さり気ない仕草等々に魅せられて溢れそうになる気持ち、使い切れずに残っていたお年玉付き年賀状に書き連ね、ほぼ毎週送った。ドラマが終わった頃たまたま入った東京出張の際には、聖地巡礼よろしく二か所ほどロケ地巡りもした。楽しかった。何もかも忘れられた。

その数年前に私は日赤病院の医師から息子たちのちよっと厄介な持病を告げられていて、仕事をしながら姑や舅の手を借りて食餌療法に取り組んでいた。それまでどちらかと言うと心の重しだった姑や舅との同居、けつこうハードな仕事、それとKさんの存在が

私の支えになった。姑の存在なしで食餌療法はできなかつたし、仕事をしている時とKさんのドラマを見ている時は「病氣」のことを忘れられた。

今では「推し」という言葉がすっかり市民権を得ていて、友達からは「推しのいるあなたが羨ましい」とよく言われる。ミーハーな私はKさん以降も何人かの推しができた。推しがサッカー選手の時には「ポランチ」とか「4-4-2」といったフォーメーションの用語を覚えたり、仏教に関心が高かった推しの時には、それ関連の本や漫画を何冊か読んで勉強になった。イギリス人の俳優の時には、英語で手紙を書いてエアメールを送り、何とイギリスから返事がきたこともある。しかし、私にとつて推しがある時は、あまり喜ばしくない事が多い。心に重しが乗っかっている可能性が高いのだ。

今、私には推しがいる。アイドルであり俳優でもある彼は何とも魅力的な青年だ。果たして、私は今大丈夫なのだろうか。兎にも角にも今夜の音楽特番の録画予約はしつかりできている。



事務局だより

前号作品はエッセイの与理原奈那さん、森江純子さん、涼野海音さん、詩の川名海至さん、ありがとうございました。これからもみなさんの作品を楽しみにしています。

会員の皆さまのご活躍

会員の皆さまが受賞された文学賞をご紹介します。

文学賞を受賞された方は事務局までご連絡ください。詳細は「とと」2ページをご覧ください。

■第60回北日本文学賞

入賞 尾野森生

■第4回鈴木六林男賞

大賞 うっかり

■第18回銀華文学賞

佳作 岡崎ゆか
菊野啓

■第23回とくしま文学賞

脚本部門 優秀 元木理恵
川柳部門 優秀 のやまきのこ
短歌部門 優秀 のやまきのこ
佳作 ミスミアヤカ
児童文学部門 佳作 松尾龍馬
現代詩部門 佳作 うっかり

みんなの文芸誌『カクヲタノシム vol.5』

2026年秋発刊予定 原稿募集

みなさまの創作活動の発表の場としてお使いください。
ジャンル不問、どなたでもご参加ご応募いただけます。

■参加掲載料

- ・詩 /1,000円 四百字詰原稿用紙1枚程度
- ・俳句 /1,000円 10句まで
- ・短歌 /1,000円 10首まで
- ・小説、児童文学、エッセイ、コラム、書評など /3,000円
四百字詰原稿用紙20枚まで(20枚以上は1枚追加ごとに+100円)

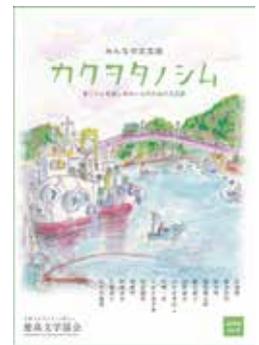
※お一人2ジャンルまで掲載OK。

※非会員の方は、上記にプラス3,000円でご参加いただけます。

■原稿締切 2026年5月31日

- ・メールにて word (テキスト) 形式の原稿データを添付。
 - ・件名に「カクヲタノシム応募作品」、メール本文に本名、会員番号、作品ジャンルを記載。
 - ・原稿にも筆者名(ペンネーム可)、作品ジャンル、作品タイトル、四百字詰原稿用紙換算枚数を記載。
- ※原稿が遅れる場合は、メールまたは電話でご予約ください。

たくさんの原稿をお待ちしています！



四国大学第四回 瀬戸内寂聴青春 エッセイコンクール

四国大学主催、徳島文学協会協賛で運営する「四国大学第四回瀬戸内寂聴青春エッセイコンクール」は、厳正な審査を行い、大賞、優秀賞、奨励賞の各賞が決定した。

大賞

「世界を変えるための『きつかけ』」

五味愛琳

早稲田大阪高等学校【大阪府】

詳細および全ての結果はこちら

<https://www.shikoku-u.ac.jp/about/attempt/5-essay/>



四国大学 第六回 富士正晴全国高校生文学賞

四国大学主催、徳島文学協会協賛で運営する「四国大学第六回富士正晴全国高校生文学賞」は、厳正な審査を行い、大賞、優秀賞、奨励賞、佳作の各賞が決定した。

大賞

「葬式」 関彩乃

筑紫女子園高等学校【福岡県】

詳細および全ての結果はこちら

<https://www.shikoku-u.ac.jp/about/attempt/frmasaharu/>



掲載作品募集

会員の皆さまの積極的なご応募をお待ちしています。

ニューズレター「とと」

原稿はワード形式で事務局へお送りください。(送信時には件名に『とと掲載用』と入れてください)

◆エッセイ等 八百字以内

◆詩 四百字以内

◆短歌 三首以内

◆俳句 三句以内

「とと」は年二回発行ですが、一回につき掲載できるのは四作品程度です。先着順で掲載できない場合は次号に回します。

ホームページ「作品広場」

原稿はワード形式で事務局へお送りください。小説、エッセイ、評論、児童文学、詩、俳句、短歌などオリジナルの作品に限ります。

最新掲載作品
エッセイ

「はだかの心根」 喜多不二夫

作品、募集要項はホームページで

<https://www.tbungaku.com/plaza.html>



文学イベント案内

短編小説講座

初心者から、短編小説の書き方を極めたい方まで、どなたでもご参加可能。参加者の作品を組上に載せて合評したり、プロの作品について講師が講義を行ったりします。

* 未完成作品の提出はご遠慮ください。

- 開催日 5月16日(土) 19時～20時
- 開催方法 『Zoom』+会場 同時開催(ハイブリッド開催)
- 場所 徳島県立文学書道館
- 参加費 作品提出: 会員3,000円/学生会員1,000円
非会員 30枚程度7,000円
50枚程度10,000円 ※
参加のみ: 会員1,500円/学生会員500円
非会員2,500円 ※

- 提出作品 原稿用紙50枚位まで
- 講師 作家・四国大学教授 佐々木義登
- 締切 開催日の10日前まで(先着順)

作品の提出方法

Microsoft Word ソフトで書かれた小説(400字詰め原稿用紙換算50枚程度まで)を事務局宛てにメール添付でお送りください。

小説エキスパート講座

全国公募の文学賞で最終選考程度の実力の方やプロの作家を目指している方向け。作品を提出した上で講師からの指名があった方を中心に、本格的なスパーリングを行います。

* 未完成作品の提出はご遠慮ください。

- 開催日 7月11日(土) 21時～22時
- 開催方法 『Zoom』による開催
- 参加費 作品提出: 会員3,000円/学生会員1,000円
参加のみ: 会員1,500円/学生会員500円
非会員2,500円 ※

- 提出作品 原稿用紙50～200枚
- 講師 作家・四国大学教授 佐々木義登
- 締切 開催日の10日前まで(先着順)

作品の提出方法

Microsoft Word ソフトで書かれた小説(400字詰め原稿用紙換算50枚から200枚程度)を事務局宛てにメール添付でお送りください。

ブンガクダンギ

～徳島から全国へ文学を発信する～

小松島市との共催により、地方文学をテーマとしたトークイベントを行います。詳細については決定次第、徳島文学協会や小松島市のホームページ・各SNS等でご案内します。

- 開催日 2月22日(日) 10時30分～
- 場所 小松島市立図書館

※非会員の方のご参加について

ご参加希望の方は事務局までメールでお申込みください。

【ご参加の条件】

- ①Zoomの基本的な操作ができる(Zoom参加の場合)
- ②事前に参加費を支払う(振込手数料はご負担ください)

■講座参加費と作品提出料は、後日とりまとめた上、請求書と払込取扱票を年2回お送りいたします。

■Zoomでの参加方法がわからない方は、無料でサポートいたします。お気軽にお問い合わせください。

「私のイチオシ本」

お気に入りの小説やマンガなどを持ち寄り、1人1作品、持ち時間5分でプレゼンします。作品の魅力に改めて気づいたり、読書の幅を広げることができます。

- 開催日 3月15日(日) 19時～20時
- 開催方法 『Zoom』+会場 同時開催(ハイブリッド開催)
- 場所 徳島県立文学書道館
- 参加費 会員のみ対象 500円

※プレゼン後の投票で1位に選ばれた方は、ととに書評(1000字程度)をご寄稿いただきます。お礼として500円の図書カードを差し上げます。

春の句会

春の句会を行います。投句は春の句を2句ですが、1句でも、聴講だけでも大丈夫です。

- 開催日 4月11日(土) 19時～20時30分
- 場所 徳島県立文学書道館
- 参加費 会員のみ対象 1,000円
- 講師 俳人・うっかり
- 締切 1週間前までに事務局へ投句

エッセイ講座

どなたでも文章スキルを身につけることで、素敵な文章が書けるようになります。参加者の作品を組上に載せて合評しながら、人を惹きつけるようなエッセイの書き方をお伝えします。

- 開催日 6月13日(土) 19時～20時
- 開催方法 『Zoom』+会場 同時開催(ハイブリッド開催)
- 場所 徳島県立文学書道館
- 参加費 会員・非会員※ 1,500円
- 講師 作家・四国大学教授 佐々木義登
- 締切 開催日の10日前まで(先着順)

作品の提出方法

Microsoft Word ソフトで書かれたエッセイ(400字詰め原稿用紙換算5枚程度)を事務局宛てにメール添付でお送りください。

みんなで歌会

各自の短歌を読みあう歌会(短歌は事前提出)を開催します。講師は歌人の田丸まひるさん。田丸さんは徳島新聞ヤングカルチャーの短歌「三十一文字の小劇場」の選者もされています。学生さんもベテランの方も、たくさんの方のご参加をお待ちしています。

- 開催日 8月22日(土) 19時～20時
- 場所 徳島県立文学書道館
- 参加費 会員・非会員※ 1,000円
- 講師 歌人 田丸まひる
- 締切 開催日の10日前まで(先着順)

作品の提出方法

お申し込み時に、短歌を一首、事務局宛にメールでお送りください。

ご入会や講座のお申込み・お問合せは徳島文学協会事務局まで

〒771-3201 徳島県名西郡神山町阿野字方子 103

TEL : 080-6284-0296 society@t-bungaku.com <https://www.t-bungaku.com/>